

高校生のビデオ制作

活動先：日本福祉大学附属高等学校等

2009年5月から7月までの間、サービスマーケティングの活動として、また福祉科教育法Ⅰの授業の一環として日本福祉大学附属高校生によるビデオ「ふくしの学びと仕事」の制作活動に参加させていただいた。私たちの役割は演技指導をすることやセリフを考えるのではなく、初めてのビデオ撮影で緊張している高校生の気持ちを和らげることや、先生、撮影スタッフと生徒たちとの橋渡し役になることだ。

5月22日(金)に、附属高校の教室で、第1回のビデオ撮影が行われた。この日は台本のほとんどがアドリブであり、また、オープニングとエンディングを同時に撮影するという事で、高校生もかなり緊張していた。撮影前、高校生と大学生が顔を合わせ、話し合いをした。内容は、将来の夢やテストの出来具合、アドリブのセリフなど。本当ならば、アドリブのセリフはこの日までにある程度決めてくるはずだったのだが、何も決めていないということだったので緊急に話し合った。しかし彼らはどうしても話が横道へ逸れてしまう。本番10分前だというのに、のほほんと「英語のテスト30点だし～」と言って笑い合っている。怖い怖いプロデューサーから、「高校生の話し合いをしっかりとまとめておいてくれ」と言われたのは私たち大学生だったので、時間を気にして焦っていたのはむしろ私たちの方だった。私たちは出来るだけ「ふくしの幅広さ」を高校生に分かってもらえるような言葉かけを行った。撮影が始まって、演出家の方から、高校生に対して細かい注文が出された。話の内容は勿論のこと、視線や、表情にまで要求が出された。高校生たちは、一度にいろいろなことを言われすぎて、特に視線や表情に気が集中してしまったために、肝心な話の内容が注文に沿った内容ではなくなっていた。何度もやり直しになったが、オープニングの撮影の最後まで撮影スタッフたちの顔は曇り空だった。私は、エンディングの撮影にも参加させていただいたのだが、この時は、カメラに映っている映像をモニターに通して見る時間が多かった。絶妙なカメラの角度や、まだ空は明るかったのにも関わらず夕焼けや影を演出している照明の技術に、ただただ感心するばかりだった。そして、高校生の演技に目をやると、オープニングの時とは全く違った姿がそこにはあった。誰に促されるわけでもなく次々に言葉が飛び出し、自然の笑顔を持って、まだ行っていないはずのインタビューの様子を想像して言葉にしていた。人は一日の間にいや、数時間でこれほどまでに成長するものなのかと驚いた。実はそうではなく、もともと彼らには能力があり、撮影当初は、その能力が緊張によって上手く出せなかっただけなのかもしれない。その緊張を解きほぐしたのが、我々大学生の力なのかもしれないと考えるだけでこの日の私たちの存在が、無駄ではなかったのだと嬉しく思えた。一回目の撮影の後は時間が合わずなかなか撮影に参加することが出来なかったのだが、しばらくして大学のレストランで高校生が在学中の学生に対してインタビューを行うという撮影に参加することが出来た。高校生の中には日本福祉大学で学びたいと思っている生徒もいたので、カメラを気にするこ

となく本当に自分の抱いている疑問や思いをぶつけていた。大学生たちもその思いを真正面から受け止め、自分達の専攻している分野の福祉について熱く語っていた。エンディングの撮影の時よりもまた成長しているように感じた。

ビデオの撮影が終わるとプロの撮影スタッフによる編集作業が始まった。編集作業は名古屋のスタジオで行われていたのだが編集作業に立ち会うことが出来るということで私は福祉科教育法Ⅰのメンバーと共にスタジオに向かった。スタジオの中には見たことも無い編集機器が並んでおり、何に使うかは分からなかったが、絶対に手を触れてはいけないということだけは分かった。たった17分足らずのビデオを作るのに大勢のスタッフが集まって徹夜で編集作業をしている姿を見て、ものづくりの大変さを知った。完成間近の映像を少しだけ見せていただいたが、現場のモニターから覗いていたものとはまた違った景色がそこにはあり、スタッフの技術と高校生たちの演技が凝縮された作品になっていた。

私たちの活動はこれで終わりではなく福祉科教育法Ⅰの授業で、このビデオを使った授業の指導案の作成、レジュメ作り、補足資料の製作を行った。このビデオは高校福祉科の生徒だけを対象としたものではなく、小学生から大人までどの年齢層の方が見てもふくしの広がりを感じられる内容であるが、ここでは高校福祉科一年生の初回授業を想定して行った。高校福祉科には介護福祉士の国家資格取得を目指して入学してくる生徒たちが多くいるので、福祉＝介護というイメージが先行しているかもしれない。そういう生徒たちに対してこのビデオを見てもらうことで、福祉のイメージが介護だけではなく例えば児童や障害者の分野、また国際分野にまで広がり、彼らの進路選択の幅を増やしていくことが出来る。また、作成したレジュメの中には一見福祉とは関係なさそうな仕事であるファーストフード店のふくし事業の取り組みやプロスポーツ選手と社会貢献活動との関わりを例示し、どの分野の職業に就いてもふくしと関わっていけるという最広義での「ふくし」にも触れた内容にしている。今後、実際にこのビデオを使った授業が出来ることを楽しみにしているしこの活動をきっかけに自主ゼミの活動を開始し、指導案作りや模擬授業を行っている。

そして、このサービスマーケティング活動を、今年度限りのものにしないように高校時代の恩師で、私が高校福祉科の教員を目指すきっかけになった高校1年生の時の担任の先生に連絡をとり、制作されたビデオをお渡しした。そして、先生の勤務する高校で来年度福祉科に入学する1年生にこのビデオを使った授業をしていただけるかもしれないという話になった。私も教壇に立たせていただけるかもしれないので4月が楽しみである。

このビデオ制作活動はサービスマーケティング活動として始めることになった。学内では学ぶことのできないことも学外に出てしっかり福祉について学ぶことが出来、この活動をきっかけに自主ゼミの活動を始めた。また、他講義である福祉科教育法Ⅰとの連携も取り合いながら教師の目線で高校生との関わり方を学ぶといった、自分達の学びをも広げることが出来た。これこそがサービスマーケティング活動の醍醐味と言えるのではないかと思う。